



世界文学全集 別巻 4

デュ・モーリア

レベッカ

大久保康雄 訳

河出書房新社

世界文学全集 別巻Ⅳ テュ・モーリア



© 1963

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和35年7月12日 初版発行

昭和38年11月20日 15版発行

定 価 320円

訳 者 大久保康雄
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 佐 藤 勇
装 幀 原 弘

印 刷：有限会社 亘明舎印刷所
製 本：美行製本株式会社
本文用紙：日本紙業株式会社
同 納 入：東邦紙業株式会社
クローズ：日本クロス工業株式会社
同 納 入：株式会社 小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291)3721~7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

レベツカ

| | | | |
|-----|----|------|-----|
| 第一章 | 三 | 第十一章 | 一五 |
| 第二章 | 七 | 第十二章 | 一七 |
| 第三章 | 一五 | 第十三章 | 一九 |
| 第四章 | 二六 | 第十四章 | 三五 |
| 第五章 | 四 | 第十五章 | 三八 |
| 第六章 | 七 | 第十六章 | 三五〇 |
| 第七章 | 九 | 第十七章 | 二八二 |
| 第八章 | 一〇 | 第十八章 | 三〇二 |
| 第九章 | 一三 | 第十九章 | 三三 |
| 第十章 | 一七 | 第二十章 | 三四 |

| | | | |
|-------|----|--------|----|
| 第二十一章 | 三三 | 第二十五章 | 四三 |
| 第二十二章 | 三二 | 第二十六章 | 四六 |
| 第二十三章 | 三六 | 第二十七章 | 四五 |
| 第二十四章 | 四七 | | |
| 年 譜 | 四三 | | |
| 解 說 | 四七 | (瀨沼茂樹) | 四七 |

レ
ベ
ッ
カ

主要人物

わたし 本編の語り手で女主人公。カロラインという名の孤児の娘。ふとしたことからイギリスの富豪マキシム・デ・ウインタールと結ばれる。

マキシム・デ・ウインタール 中年のイギリス紳士。マンドレイに城のような邸宅をもつ富豪。妻レベッカを失ってから暗い影がただよう。

レベッカ マンドレイの入江で溺死したマキシムの妻。美貌で、教養すぐれた社交的な女性。

ジャック・ファヴェル レベッカのいとこ。身持ちの悪い男。

デンヴァース夫人 マンドレイの屋敷の家事一切を切りもりしている家政婦。レベッカの娘時代からの友達。

ペアトリス マキシムの姉。
ガイルズ ペアトリスの夫。

フランク・クローリ マンドレイの支配人。独身で忠実な男。

ヴァン・ホッパー夫人 カロラインの前主人で、おしやべりの有閑マダム。

ベン マキシムの借地人のむすこ。白痴。

ロバート マンドレイの召使。

クリリス マンドレイの女中。

アリス マンドレイの女中。

シヤール カーリスの港湾監督官。

ジュリアン 大佐。行政長官。

ウエルシュ 警視。

ジェームズ・タップ レベッカのヨットを改造したカ

ーリス港の船大工。
ペイカー カーリスの医師。

第一章

昨夜、わたしはまたマンダレイへ行った夢をみた。車道につづいている鉄門のかたわらに、わたしは立っていらした。しかし道がふさがっているので、しばらくのあいだ、中にはいることができなかった。門には錠がおりていて、鍵がかかっていた。わたしは夢の中で、門番を呼んだ。しかしなんの返事もなかった。さびついた門のあいだから中をのぞいて見ると、番人小屋にはだれの姿も見えなかった。

煙突からは、一条の煙も上らず、小さな格子窓が、しよんぼりと口をあけていた。やがて、だれでも夢の中で経験するように、ふいに、わたしのからだには超人的な力が加わった。わたしは、まるで精霊のように、目の前にある障害物を乗り越えた。車道は、いつもとおなじに、まがりくねってつづいていたが、だんだん進んで行くにつれて、以前とは変わっていることに気がついた。

それは、わたしたちの知っている車道とはちがって、せまく、荒れ果てていた。わたしは、はじめ変な気がして、何が何やら、すこしもわからなかった。しかし、一本の木の揺れている低い枝をさけようとして頭をさげたと、き、やっと事情がのみこめた。自然が、ふたたび力をもりかえてきたのである。そして、すこしずつ、こっそりと、陰険に、そのねばりづよい長い指で、車道を侵略してしまったのだ。あのころでさえ、いつも空おそろしい気持ちをあたえていた叢林が、いまや完全に最後の勝利をしめ、車道の両側に、暗くごちゃごちゃと茂り合っていた。白い脚をむき出しにした榊は、たがいに寄りあい、もつれあい、枝と枝を奇妙なふうにからみ合わせて、まるで教会の拱廊のような円天井を、わたしの頭上につくっていた。そのほかにも、さだかではないが、たくさんの木々が茂っていた。ずんぐりとした榊や、ねじくれた榊などが、榊とびったりくっついて生い茂りながら、わたしの記憶にもぜんぜんないような巨大な灌木や草とともに、静かな大地から、によきによぎと頭をもたげていた。

砂利の敷きつめてあった車道は、いまや一面に草や苔でおおわれて、まるで一本のリボンとしか見えず、以前のおもかげは、ほとんど失われていた。木々が低い枝を

はりのばして行く手をはばみ、骸骨のように見える節くれ立った根が、とぐろをまいていた。しかし、そうした鬱然たる叢林のあいだにも、むかし地界標として植えられた灌木や、手入れが行きとどいて美しかった木々や、青い花冠ですぐにそれとわかる紫陽花などを、わたしは、あちこちに見ることができた。紫陽花は、何も成長をさえぎるもののないのをよいことにして、いつしかふたたび野生にかえり、ものすごいほど背丈が高くなつて、一本の花さえつけず、そばに生えている名も知れぬ寄生植物と同じように、黒く醜い姿をさらしていた。

むかし、わたしたちの車道であったこの一条のリボンは、東にまがり西にねじれつつ続いていた。ときどきわたしは道を見うしなつた。しかし、いつしかまたそれは、倒れた木の下や、冬の雨でできた泥だらけの溝の向こう側などにあらわれるのであった。あの車道が、こんなに長いとは思っていなかった。樹木が生長したように、道もまた、ぐんぐんのびてしまったのであるうか。そして、この小道は、ことによると、あの邸宅ではなくて、どこかの迷宮へ——荒涼たる広野にでも、通じているのかもしれない。だが、やがて、とつぜんわたしは邸の前に出た。八方に枝をひろげて、異様に生い茂つた一本の大きな灌木が、頭上におおいかぶさっていた。胸を

どきどきさせ、涙で目の奥が妙にちりちりするのを感じながら、わたしは、その場に立ちすくんだ。

マンダレイが——わたしのマンダレイが、いつものとおりに、ひっそりと、人目をはばかるようにして、そこに立っていた。灰色の石は、夢の中の月光にがやき、堅柿のついた窓々が、緑の芝生と露台とを映していた。建物と建物との完全な均斉も、屋敷そのものも、手にのせた宝石のように、時は、すこしも破壊していなかった。

露台は芝生のほうに傾斜し、芝生は海へとつづいていた。ふり向くと、さながら風や嵐に乱されることのない湖水のように月光に輝く銀色の静かな水面が見えた。どんな波も、この夢の海面をうねらせはしないであろう。また、どんな雲の群れも、西風に吹き送られて、この澄んだ青白い空を曇らせるようなことはしないでであろう。わたしは、ふたたび屋敷をながめた。屋敷は、まるでわたしたちがきのうまでそこに住んでいたかのように、傷一つ受けず、もとのままの姿で立っていたが、見ると庭園は、やはり林と同じく、叢林のおきてにしたがっていた。石楠が、羊歯を幾重にもからみつかせながら五十フイートも伸び、無数の名も知れぬ灌木と野合して生まれた、いじけた私生児どもが、自分たちのまともでない生

まれをよく心得てそうしているかのように、その根もとにまつわりついていた。

ライラックは、銅色の櫛かみと連れ添っていたが、いつでも美への敵である意地悪のきづたは、この一対をも、びったり結びつけようとして、巻きひげをこの一対にからんで、しっかりとしばりつけていた。この見すてられた庭園の中で、一ばん幅をきかせているのはきづたで、長い股またを芝生の上にふんばり、いまにも屋敷にせまる勢いを見せていた。このほかに、もう一種類の植物があった。それは、もともと森から渡ってきたもので、ずっと以前に、木々の根もとに種子たねをまき散らして行き、そのまま忘れられていたのだが、いまやきづたといっしょになつて進軍を開始し、巨大な大黃だいぢうのような醜い姿で、かつては水仙の咲きにおつていたやわらかな草地のほうへ、不遠慮に突進せんとんしていた。

その軍団の先鋒せんぽうであるいらぐさが、いたるところに生えていた。そして露台をいちめん塗ぬりつぶし、小道のまわりにはびこり、屋敷の窓々にさえ、そのみっともない、ひよろ長い姿をなびかせていた。しかし、いうなら、それらは、しごくむとんじやくな哨兵しやうへいであり、その隊列は、いたるところで大黃だいぢうのような草のために乱みだされていった。そして、ひよろひよろした茎こゝろの上に、頭をしわくち

やにして横たわりながら、うさぎの通路をつくっていた。わたしは車道をはなれて、露台のほうに行った。そこら一面に、いらぐさが茂さかっていたが、わたしは気にもとめなかった。夢の中のわたしは、ふしぎな魔力で歩いていった。何ものも、わたしをさえぎることはできなかった。夢見る人の幻想にたいしてさえ、月光は、奇妙ないたずらをするものである。そこに、じつと静かに立っているうちに、いつしかわたしは、屋敷が空からっぽの抜け殻がらではなく、以前と同じように、ちゃんと人間が住んでいるのだと思ひこんでしまった。

窓々からは光がもれ、カーテンは夜風にやわらかく吹きなびいた。きつと書斎のドアは、わたしたちが立ち去ったときと同じように、半ばひらかれており、秋ばらの鉢はちのそばにあるテーブルの上には、わたしのハンカチがのっているにちがいない。そして、部屋の中は、ついきましたがたまで、わたしたちが住んでいたことを、はっきりと示しているだろう。積み重ねられた書物や、投げ出された「タイムズ」紙は、わたしたちが、すぐに帰ってくることを語っているだろう。たばこの吸いさしのある灰皿、いすによりかかりながらつけたわたしたちの頭の型ののこっているクッション。暖炉の丸太の黒く焦げついた燃えのこりは、まだ明け方にかけて、ぶすぶすとい

ぶりつづけているだろう。それからまたジャスパー、利口そうな目と、大きなたるんだほおをもっているかわい
いジャスパーは、相変わらず床に寝そべっていて、主人
の足音がきこえると、しっぽをトンと音させて振ること
だろう……。

いままで見えなかった雲が月にかかってきて、ちょっ
との間、まるで顔の前につき出された黒い手のように、
そのあたりをさまよっていた。それとともに、幻覚は去
って、窓にさす燈火も消えてしまった。わたしの目に映
るのは、人気ひとけのなくなった、住む人もない、ものさびし
い抜け殻の屋敷であり、じっとこちらを見つめている壁
のあたりからも、すこしも過去のささやきは聞こえてこ
なかった。

邸は墓場となった。しかも、その廃墟はいきょの中には、わた
したちの恐怖や苦悩が埋もれているのだ。もう永久に復
活のときはないであろう。もし目のさめているとき、マ
ンダレイのことを考えたとしても、わたしは、べつにそ
れほど悲しみはしないにちがいない。そして、あるがま
まの姿で思いうかべ、すこしも恐れずに、そこで暮らす
こともできるだろう。夏のばら園や、夜明けに歌う小鳥、
さては栗の木の下でのんだお茶のこと、足もとの芝生か
らわきあがる海のさざめきなどを思い出すことである

う。

花をつけたライラックや「幸福の谷」のことも、わた
しは考えるだろう。これらのものこそ、永遠の生命をも
っていて、いついつまでも消滅することはしないのだ。そ
れは、何もものもそこなうことのできない思い出なのだ。
こんなことを、夢の中で、雲が月のおもてをおおってい
るあいだに、わたしは考えていた。多くの夢見る人のよ
うに、わたしもまた自分が夢を見ていることを知ってい
た。現実のわたしは何百マイルも離れた異郷ふとせにいたので
ある。そしてあと何秒かすれば、なんの風情ふせいもない、また
そのゆえにこそ気楽な、質素で小さなホテルの寢室の中
で目をさますのだ。そして、ちょっと溜息ためいきをつき、背の
びをし、寝がえりをうつ。それから目をあけて、夢の中
のやわらかい月光とはまるでちがった、きらめく太陽
や、澄みきった激しい空の色を見て、どぎまぎするだろ
う。ながい、なんの事件もない、そして、わたしたちの
いままで知らなかったような、静かな、快い、平和にみ
ちた一日が、わたしたちの前に横たわっている。ふたり
ともマンダレイのことなどは、すこしも口に出すまい。
わたしも、夢のことなど、しゃべろうとはしないだろう。
なぜなら、マンダレイは、もはやわたしたちのものでは
ないからだ。マンダレイは、もうなくなってしまうのだ。

第二章

わたしたちは、二度と帰って行くことはないであろう。それは、わたしにもわかつている。だが、過去は、まだあまりにも、わたしたちに近すぎる。わたしたちが、忘れようとつとめ、背後へ押しやろうとしているさまさまの出来事は、かならずふたたびあがき出すにちがいないのだ。そして、いかにまぎらそうとしても、恐怖や、いい知れぬ不安や、まるで手のつけようもない惑乱などが——現在はいいぐあいにしずまっているものまでが——いつまた以前のように、思いもかけぬ方法で、絶えず心につきまとうようになるかもしれないのだ。

彼は、おどろくほどしんぼうよく、ぐちひとつこぼさない。よしんば記憶がよみがえるときでさえ——。そういえば、彼の心には、わたしに語る以上に、しばしば過去の思い出がおそってくるらしい。

ときどき彼は、ふいに、茫然と、まるで放心したようになる。あらゆる表情が、まるで目に見えぬ手で、すっかりぬぐいとられてしまったかのように、いとしい彼の顔から消え去ってしまう。そして、その後には、木彫のよ

うな仮面があらわれる。それは、端然と、冷やややかで、美しくはあるが、生命あるものとは思われない。彼は、火を消そうともせず、つきからつきへとたばこを吸いつづける。火のついた吸いがらが、まるで花弁のように、そこら一面に散乱する。なんでもないことを、熱心に、早口でしゃべり立てて、まるで苦痛を癒す靈薬でもあるかのように、どんな話題にでも、きおいこんでとびついて行く。「男も女も、苦悩をへて、はじめて、より美しくなれる。どんな世界でも、前進するためには、われわれは、火をもってする阿責に耐えなければならぬ——こうした説があるような気がする。こういえば皮肉に聞こえるかもしれないが、わたしたちは、じゅうぶんにその阿責を耐え忍んだのだ。わたしたちふたりは、恐怖を知り、さびしさを知り、大きな苦悩を知った。だれの生涯にも試験のときが、おそかれ早かれ一度はやってくるものにならぬ。しかも、わたしたちふたりには、わたしたちを圧迫し苦しめる特別の悪魔がついていて、けつきよくこれと戦わねばならなかったのだ。わたしたちは、わたしたちの悪魔を征服した。あるいは征服したと信じている。

悪魔は、もはや、すこしも、わたしたちを苦しめはしない。多少の手傷は負ったが、わたしたちは無事に危地

を脱することができた。きたるべき災厄にたいする彼の予言は最初からまちがってはいなかった。わたしは、つまらない芝居の中のそうぞうしい女優のように、大声に自由をあがなったのだと叫んでいいのかもしれない。だが、わたしは、この生涯でじゅうぶんメロドラマを演じたのだ。もし、わたしたちの現在の平和と安全とが、いつまでも保証されるものなら、わたしはよろこんで、わたしの五官を犠牲にするだろう。幸福というものは、あがなうことのできる持ちものではなくて、一つの思考の性質であり、心の状態である。もちろん、わたしたちには、失望落胆の瞬間が幾度かあった。しかし、この世には、時計ではかることのできない時間、永遠の中へ突進するような瞬間だって、決してなくはないのだ。彼の微笑に、ふと目をとめたわたしは、わたしたちがいっしょであること、一心同体となって進んでいること、いかなる思想や意見の衝突も、わたしたちのあいだの障害とはなりえないことを知った。

もはや、わたしたちのあいだには、たがいになんの秘密もない。すべてのものをわかちあっている。なるほど、わたしたちの住んでいる小さなホテルはお粗末だし、料理はまづいし、毎日毎日、判で押したように同じ朝を迎えるのであるが、それでもわたしたちは、べつに、それ

以上のものを望んでいはいないのだ。もし別なりっぱなホテルに泊まったら、彼の知っている大ぜいの人たちと顔を合わせねばならないだろう。わたしたちふたりには、簡素のありがたさが、よくわかっている。たとい、ときどき退屈するにしても——いやいや、退屈は恐怖にたいするところよい解毒剤なのだ。わたしたちは、きわめてふつうの生活をしている。そして、わたしは大声でものを読む才能を発達させた。彼がいらいらするときといえ、ただ郵便配達夫がおくれるときだけである。つまりそれは、わたしたちが、イギリスからくる郵便物の到着を、もう一日待たねばならないことを意味するからだ。ラジオをいじってみたこともあったが、騒音が耳ざわりなので、すぐやめて、けっきょく、興奮は、うちにたくわえておくことにした。しかし、幾日か前のクリケットの遊戯は、たいへんわたしたちには効果的だった。

あの優勝決定戦や、ボクシングの勝負や、それに撞球の試合なども、わたしたちの退屈をなぐさめてくれた。学生のスポーツや犬の競走や、へんびな田舎で行なわれるさまざまの珍しい競技は、すべて、飢え渴しているわたしたちの製粉所に投げあたえられた一挽分の麦であった。ときには、古い「フィールド」紙の一束が、とりだされることもある。すると、たちまちわたしは、この退

屈な離れ小島から、イギリスの春のまつただななにつれて行かれる。白い流れや、かげろうや、緑の牧場で成長する栗毛の馬や、マンダレイでよく見たように森の上に乗った大地のにおい、沼地の泥炭の酸いような異臭、鷺の糞で白く斑に染まったぬれた苔の感触などが、それらの汚れたページのあいだから感じられる。

一度、森の鳩について書いた記事が載っていたことがある。それを大声で読みながら、わたしは、なんだか、またマンダレイの深い森の中において、頭上に鳩の飛びかうような気持ちになった。やさしい満ちたりた鳩の鳴き声がきこえた。暑い夏の日の午後には、それは、いかにも涼しい快いものである。かわいいジャスパーが、わたしを探して、湿った鼻さきで地面をかきまわりながら、下生えをわけてとんでくるまでは、彼らの平和をさまたげるものは何もないのだ。やがて犬の姿を見ると、鳩は、まるでふいに沐浴の場をおそわれた老貴婦人のように、あわてふためいて地面から飛び立ち、すさまじい羽音を立てながら、はるかな梢のあなたへと飛び去って、姿も見えず声もきこえなくなってしまう。鳩が行ってしまうと、あたりはふたたび、ひそやかな静けさにつつまれる。すると、わたしは——なんとということもない不安を感じ

ながら——太陽はもう、さざめく木の葉の上に光の模様を織り出さず、木々のあいだはうす暗く、地に落ちた影の長くなったのを知る。もう部屋には、お茶と新鮮な黒いちごが用意されているだろう。そこで、わたしは、羊歯の寝床から起き上がって、スカートについた去年の枯れ葉の羽毛のように軽いほこりを払い、ジャスパーに口笛を鳴らしながら、家のほうへ帰って行く。そして、足を早めながらも、何かなし、ちらとうしろをふりかえって見るのだ。

森の鳩についての記事は、こんなにも、あのころを思い出させ、声をあげて読むわたしを口ごもらせた。ふと、彼が沈うつな表情をしているのに気がついて、わたしは急に読むのをやめた。そしてページをめくって、ひどく現実的で退屈なクリケットの記事を見つけ出した——ミドルセックスが、オヴァルの競技場で一方的な試合をして、うんざりするような試合の回をかさねたという記事である。フランネルのシャツを着て打球棒をふるっている人々のまのぬけた姿に、どんなにかわたしは心ひそかに感謝したことであろう。彼の顔は、ふたたびやわらいで、ほおにも赤味がさしてきた。サリーが、ひどくあせりながら球をころがしている場面になると、彼は声を立てて笑った。

わたしたちは、過去の中に引きずりこまれることから、やっと救われる。わたしは、いい教訓を得た。そうだ、これからは、イギリスの新聞の中の、スポーツや、政治や、ぜいたくな事柄などについての記事ばかり読むことにしよう。気にかかるような記事は、あとで自分ひとりでこっそり読めばいい。それは、わたしの秘密のたのしみになる。色とにおいと音、雨と水のさざめき、秋の霧や満潮のかおりさえも、すべては、打ち消すことのできぬマンダレイへの思い出なのだ。世の中には、旅行案内の時間表の熱心な読者がいるものである。彼らは、不可能なもの同士を結びつけるのがおもしろさに、たえず国じゅうを旅行してまわることを計画する。しかし、わたしのたのしみは、奇妙なことは奇妙だが、それほど退屈なものではない。わたしは、イギリスの田舎についての情報本部になるのである。イギリスのあらゆる猟場の持ち主のひとりひとりの名まえ——それから、その借地人の名まえまでも、わたしは知りつくしてしまう。松鶏や鷓鴣が何羽殺され、何頭の鹿の首が斬られたか、また鱒は、どの川をさかのぼり、鮭は、どこではねあがるかも、ことごとくわたしは知ってしまう。わたしは、あらゆる集会所に姿をあらわし、あらゆる狩猟について行く。猟犬の子を散歩させている人々の名まえさえ、わたしは全

部おぼえてしまう。収穫の状態、ふとった家畜の値段、豚のふしぎな食物などについても精通する。おそらく、くだらないひまつぶしで、あまり賢明とはいえないかもしれないが、しかし、わたしは、読んで行くうちに、イギリスの空気を呼吸し、勇気に満ちて、このまばゆく晴れあがった空を仰ぐことができるのだ。

荒れ果てたぶどう畑も、ごろごろと散乱している石ころも、気にかからなくなる。なぜなら、そうしようときえ思えば、わたしは自分の空想を思うままはたらかせて、縞模様をなしているぬれた生垣からジギタリスや青白いはこべを摘みとることだってできるのだから。

やさしく、おとなしい幻想の、あわれな気まぐれ。だが、これこそは、悲哀と後悔への敵、そして、わたしたちがすすんではいってきたこの流謫生活をなぐさめてくれるものなのだ。

それらのおかげで、わたしは、わたしの午後をたのしみ、微笑をうかべながら元気よくもどってきて、いつものささやかなお茶のテーブルにつくこともできるのだ。献立は、いつも同じである。めいめいに、二きれのうすいバターと、支那茶がつく。イギリスの習慣をきちょうめんにまもっているわたしたち夫婦は、よそ目には、どんなにか偏屈に見えることだろう。何百年とかかわらぬ

太陽の下に、なんの風情もない小ぎれいなバルコニーにすわりながら、わたしはいま、マンダレイの四時半のことを、それから書斎の暖炉の前に引きよせられたテーブルのことを考えている。ドアが時間かつきりに、さっと押しあけられる。そして、お茶や、銀の皿や、湯沸かしや、雪白のテーブル掛けが、テーブルの上におかれる。耳をだらりと垂れたジャスパーは、お菓子が運びこまれても、いっこう気にもとめぬようなふりをする。いつも、わたしたちの前には、いろんなごちそうがならべられる。しかし、わたしたちは、ほんのすこししか食べない。

汁の垂れる焼きたての菓子や、いまでも目の前にうかんでくる。それから、小さく縮れた楔形のトースト、熱い湯気を立てている薄い菓子、ふしぎな風味をもつていて、とてもおいしく、なんでつくったのかよくわからないサンドイッチ、非常にめずらしい生姜パン、口へ入れると溶けてしまうエンゼル・ケーキ、それについてくる干ぶどう入りの、皮の張った、あまりおいしくない菓子。それはじっさい、飢えた一族の口を、一週間はじゅうぶんにささえて行けるくらいの豊富な食物であった。わたしたちの食べ残したそれらの菓子類が、どうなってしまうのか、わたしは知らなかった。しかし、ときどき、この食べ残しのが気になってならなかったものだ。

しかし、それをどう始末したかについて、家政婦のデソヴァース夫人にたずねるようなことは一度もしなかった。そんなことをすれば、彼女はきつと、例の勝ち誇ったような微笑をうかべて軽蔑するようにわたしをながめ、そして、こういうにちがいないからだ——「デ・ウインタール夫人が生きていらした時分には、だれもぐちをいうものなんてごさいませんでしたわ」デソヴァース夫人、彼女はいま何をしているだろうか？ それからファヴェルは？ はじめて、わたしに不安な気持ちを起こさせたのは、たしかに彼女の顔の表情であった。わたしは、本能的に思ったものだ。「この女は、わたしとレベッカを比較している」すると、剣のように、さっとその影が、わたしたちのあいだにはいつてきた。

もういい。それはもう過ぎ去ったことにすぎない。もう片づいてしまったことなのだ。わたしはもう苦しめられなくてもいい。ふたりとも自由なのだ。わたしの忠実なジャスパーさえも、たのしい狩猟場へ行ってしまった。マンダレイは、もうどこにもないのだ。夢で見たように、それは、まるでからっぽの貝がらのように、齶々とした深い森の中に横たわって、無数の雑草にとりまかれながら、小鳥の宿になつているのだ。おそらくは、ときどき浮浪者が驟雨を避けて、そのあたりをうろつくこともあ

るだろう。そして、もし大胆な男なら——ずんずん屋敷の中へはいりこんで行くかもしれない。しかし、おくびょうな浮浪者や、神経質な密猟者にとつては——マンダレイの森は、決して快い憩いの場所ではあるまい。それらの人たちは、きつと谷間の小さな小屋によるけこむにちがいない。そして、そりかえった屋根の下で、わびしい思いをしながら、霧雨にいれずみをぬらすことであろう。あそこには、まだ一種の重苦しい雰囲気がただよっているにちがいない……。灌木が砂利の道にはびこっているあの車道の角にしても、やはり太陽が沈んでからは人の憩うべき場所ではない。木の葉のさらさらと鳴る音は、イーヴニング・ドレスを着た婦人の、ひそやかな衣ずれの音にも似ている。そして、枯れ葉がふいに身をふるわせて地面に散るときには、急ぎ足で歩く女の、かさこそという足音のようにもきこえよう。それから、砂利にしるさされているのは、ハイヒールの繻子の靴の跡型なのだ。——

こうしたことを思い出すたびに、わたしは、ほっとした気持ちで、バルコニーの外をながめる。ぎらぎらと輝く外光の中には、忍び寄る一点の影もなく、石ころだらけのぶどう畑は陽光にきらめき、おしろい草は白くほこりをかぶっている。いつかは、わたしも、この風景を、

愛情をもってながめることができるかもしれない。しかし、いまそれが、わたしにあたえる感動は、愛情というよりも、むしろ信頼の気持ちである。よし、それが、この日、いくらかおそまきにわたしの心に起こったにせよ、信頼という感情ほど、わたしにとつてとうといものはない。わたしが、このように大胆になれたのも、彼がわたしを信頼していてくれるからだと思う。とにかく、知らない人たちにたいする遠慮や、おくびょうな態度や、はにかみは、わたしから消えてしまった。自分が、どうにも不器用なのに負目を感じる一方、どうにかして気に入られようと熱心に望みつつ、希望に燃えて、いそいそとマンダレイへ行つたときの自分とは、わたしは、まるでちがった女になってしまった。わたしがデンヴァース夫人のような人たちに、あのような悪い印象をあたえたのは、もちろんわたしに重みがなかったからであろう。レベッカのあとにすわったわたしは、はたしてどんなふうに見えたのであろうか。記憶が、現在と過去の歲月のあいだに橋をかけ渡してくれるので、わたしはいま、縮らしてない断髪、おしろいけのない幼稚な顔つき、お手製のぶかっこうな上着とスカートとジャンパーを着て、まるで内気な子馬のように、おどおどとヴァン・ホッパー夫人の背後にくっついて歩いていたわたし自身を、はっ